

中学生 優秀賞

一つのきつかけから

大阪教育大学附属平野中学校

三年

橋山

優花

私は毎日電車に乗って通学しています。学校帰りに塾へ行き、夜遅く家に帰ることもありません。夜の九時頃電車に乗ったある日、静かで重い空気の電車の中に、「んー。あー。」という大きな声が響きました。何を言っているかはわかりませんが、一目見て障がいを持った男の子の声だとわかりました。その声に、座って寝ていた人は目を覚まし、携帯を見ていた人も皆その男の子に注目しました。私も何事だろうと思い、思わず眉をひそめて様子を伺っていました。電車の中の重い空気がさらに重く感じられました。男の子と一緒にいたお母さんと思われる女性は、ただただ申し訳なさそうにまわりの人たちに頭を下げていました。その時、近くに座っていた

男性が大きな声で笑いながら男の子に声をかけました。  
「電車混んでるし、疲れるよなあ。ここに座りー！」  
と、男の子に席を譲りました。その男性の一言で電車の空気がガラリと変わりました。周りの人たちがみんなニコニコしているのです。いつも夜遅い電車では誰もが疲れていて、みんなの顔が穏やかになっているのを私は初めて見ました。私も自然と笑顔になっていました。それと同時に、あの男性のように、何故自分は笑いながら席を譲れなかったのだろう。昔の私ならただ傍観者でいるなんてことはなかったのではないか、そんなことを考えるようになったりました。  
私が通っていた小学校には障がい児童が通うクラスがありました。  
一緒に授業を受けることはなくても、私たちの以前の担任の先生が特別学級のクラスを受け持っていたこともあり、休み時間に一緒に

遊んだり、給食と一緒に食べることもあり、誰もがクラスの一員の様に思っていました。遊んでいるとよだれが出てきてしまう子もいました。それを気づいた子がティッシュを出して拭いてあげていました。一度、先生にそのことでほめられたことがあります。「ティッシュを出して拭いてあげるなんて偉いね。」友人の一人が先生に言いました。

「だって先生も誰かが転んで血が出ていたら、ティッシュで拭いてあげるでしょ？」当時、私もそんなことは当たり前のことだと思っていました。自分たちの周りに少し助けを必要とするが一緒に生活をしている、そんな日常があったからこそ、当然のことだと思っ

て行動していたのだと思うのです。奇声をあげる男の子や申し訳なく思っ

て頭を下げるお母さんの様子を見て、自分は関係ないと思う人の多いこと、自然と手を差しの

べてあげられない人の多いこと、普段電車に乗っていても、誰かに迷惑さえかけなければそれでいいと、極力他人と関わらずに過ごそうとしている人が本当に多いと感じます。私もいつのまにかその一人になってしまっていたのだと思います。

電車で出会った男性のように、ちよつと勇気を持って一つ行動を起こすことだけで、その場の雰囲気も周りの人たちの気持ちも変えられるのです。社会には色々な人たちが一緒に暮らしているということを忘れずに、自分以外の誰かを思いやる気持ちを持ちながら生活することが大切だと思います。それが心の輪を広げるきっかけになるのではないでしょうか。そうすることで、障がいを持った人たちやその家族が少しでも暮らしやすい社会が広がっていくのだと思います。